



暁鐘の音

NO.21

(かねのね)

秋田大学教職大学院

2021.7.26

令和3年度、新たなメンバーを迎え教職大学院始動！

今年度は、現職院生10名、学部卒院生5名の新たな仲間を迎え、教職大学院での学びを深めています。コロナ禍のため、状況に応じて、zoomと対面を使い分けながら教師力の向上を目指す生活を送っています。

◇現職院生1年次

- 今井 彩さん … 「聴く、読む、考える、伝える、気付く、生かす」を大切にして頑張ります！
- 江幡 隆弘さん … 「人生とは何かを計画しているときに起きる別の出来事のこと」
- 大塚 邦子さん … 睡眠時間は増えましたが運動量は減りました。健康第一で頑張ります
- 工藤 智史さん … (あ) くなき探求心で、(き) あいを入れて、(た) のしく学べる一年間にしたいです。
- 近野 祥子さん … 何事においてもバランスを大切にしています。食と健康、強さと優しさ、ほどよい距離とコミュニケーション。
- 近野 勇雄さん … これからがこれまでを決める
- 櫻庭 泰則さん … 千里の道も一歩から
- 佐藤 茂樹さん … たくさんのことを学び、そして研究に励み、自分自身を「研ぐ」1年にします。
- 正木 節さん … 千里の道も一歩から
- 吉川 寿朗さん … 「人事を尽くして天命を待つ」できることを精一杯頑張ります。

◇現職院生2年次

- 小熊 大樹さん … 人を相手にせず天を相手にせよ

◇学部卒院生3年次

- 本田 和也さん … 小さな事に忠実でありたい。

◇学部卒院生2年次

- 伊藤真里奈さん …… 永遠に小学生！
- 大関 隆貴さん …… 人間万事塞翁が馬。自分らしく毎日頑張ります。
- 小野 彰斗さん …… 日常の延長に未来はできる
- 工藤 唯花さん …… あと1年で現場へ！毎日コツコツ、着実に。
- 佐藤 大星さん …… 日々精進
- 清水 里沙さん …… 故きを温ねて新しきを知る
- 庄司 航さん …… 人生は単純だ、選んだ道は後悔するな
- 相馬 舜平さん …… Persistence pays off
- 高橋 海渡さん …… 思い立ったら即行動
- 新山壮一郎さん …… 出来るか出来ないかじゃない。やるかやらないかだ！
- 三保 翔さん …… 好きこそ物の上手なれ

◇学部卒院生1年次

- 浅野 匡平さん …… 「別に死ぬわけじゃないしな〜」重く考えすぎずに、いろいろなことを楽しみながら生きていきたいと思います。
- 阿部 倫己さん …… 人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。
- 佐々木健真さん …… 千里の道も一歩から。日々の積み重ねを大切に頑張ります！
- 嶋崎 友貴さん …… 愛だけでは子どもを支援できない。でも愛がなければ子どもを支援できない。
- 平塚 達也さん …… 水滴石を穿つ

GIGA・STEAM・EdTech・well-being・ニューノーマルな教育？

教職実践専攻長(教職大学院)
教授 鎌田 信

PISA や TIMSS という単語がようやく耳慣れてきたと思ったら、今度は GIGA スクールにウェルビーイング (well-being)、STEAM 教育、EdTech、ニューノーマルな教育……。STEAM 教育に至ってはつい最近まで STEM 教育だったものがいつの間にか「A」が追加され STEAM 教育に変わっていました。横文字、カタカナ言葉があふれ、「あれ、この横文字は何？」と言葉の意味を検索することからはじめなくてはなりません。「日本語で表記しろよな」と、つい、言いたくなるような教育界もそんな時代です。

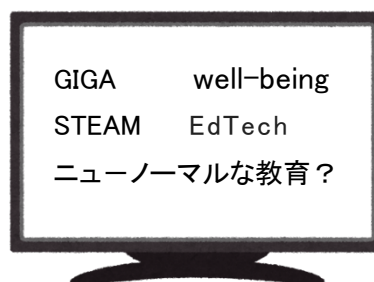
教育から少し離れると Z 世代という言葉も時折、耳にします。Z 世代は、おおむね 1990 年代後半から 2000 年代前半に生まれた世代を指します。何年生まれなのかは厳密な定義はないが、2010 年頃から 2020 年代にかけて社会に進出していく世代の若者で、ジェネレーション Z とも呼ばれているようです。一方で Z 世代はソーシャルメディア時代の人たちであり「ソーシャル・ネイティブ」とも呼ばれています。つまり、教職大学院の皆さんはこの時代の人間ということになります。

教育界はコロナ禍の影響で大きく変容しようとしています。その現場に半

年後、または一年半後皆さんは出て行くこととなります。これまで学んだスキルや考え方が適用できず、発想の転換や応用力が求められる現場がそこにはあります。そんな中でも「Z世代」の皆さんは、ソーシャルメディアを駆使して豊かな発想で新たな教育現場を構築していくものと信じています。そのためにも今は教職大学院生だからこそ熟考できるこの時間、これからの教育について柔軟な発想をもってじっくり考える時間として欲しいものです。

感染収束後の「ポストコロナ」における社会は私たちの生活のみならず、社会、経済、私たちの行動、意識、価値観までその影響は波及すると言われていいます。もちろん学校の様相も変わり、いわゆる「ニューノーマルな教育」に移行していくことと思われまます。GIGA・STEAM・EdTech・well-being・

ニューノーマルな教育・・・、横文字も理解しなくてははいけないし、変化にも対応しなくてははいけません。しかし、どんな時代が到来しても変わらないことがあります。それは、教育は子どもが原点だということです。目まぐるしく変化していくこの時代、時々この北極星の位置を確認しながらゆっくりと教職という道を歩んで行ってほしいものです。



た すが
「矯めつ 眇めつ」

教職実践専攻(教職大学院)

特別教授 秋元 卓也

ある中学校に勤めていた時の話です。職員室の入り口付近に「生け花」コーナーがありました。数年来、近所の同窓生がボランティアで生けてくださっていました。例えば「木苺とアイリス」という花題の日もあり、時々季節を感じさせてくれていました。

「興味のある生徒さんがいれば、簡単な教室を開いてもいいですよ。」とのご提案で、毎週火曜日の放課後に、生活科学部の生徒が数名交替わりで一輪挿しに挑戦することが校長室の風景になりました。まずは花材を見つめることから始まり、生けた花の鑑賞会までを三十分程で行うのです。大学・院時代から野生動物を調査して野山を

歩き回った私ですが、野山から摘んできた花を生けるとなれば勝手が違います。それでも部の顧問の先生と一緒に参加させてもらいました。

校長室には、片目をつむり花の向きや見え方に苦心する生徒の姿がありました。短いながらも静謐な空間を流れていく時間と緊張から解放される瞬間とがありました。

「眇む先 生けて安堵の 紫蘭立つ」

その頃、様々な会議に出席させていただきましたが、ご来賓の方々には必ずと言っていい程、「本県の状況は、生徒指導と学習指導の両方で安定した良好な状態にあります。」とご挨拶してくださり、私もそのこ

とを実感していたので誇らしさを覚えたものです。

さて、秋田県検証改善委員会(委員長 成田雅樹先生)がまとめた「令和3年度 学校改善支援プラン」の中に本県の小・中学校のよさを生かし、更に充実・発展させ

るための～5つのエッセンス～が示されています。棟梁が精度の高い仕上げのためにそうするように、教育にも矯めつ眇めつの仕業が、継承の先の発展に向けて、今必要とされているのだと思います。

教職大学院に入学して

発達教育・特別支援コース
現職院生1年次 大塚邦子

早くも教職大学院に入学して3か月が過ぎました。オンライン授業や2mの間隔を空けての対面授業に加えて学生の構内入構禁止など、コロナ禍の影響はありますが、意欲さえあれば年齢も場所も状況も関係なく学ぶことはできるのだということを改めて認識し、大学院生として充実した毎日を送っています。

私は、発達教育・特別支援教育コースを志願し入学しました。現職教員として、大学院入学を決意することには迷いもありましたが、今は入学して良かったと心から感じています。児童生徒数が減っているのに対して、特別な支援を必要とする子どもの数は、年々増えています。LD、ADHD、ASDなどの発達障害の児童生徒が安心して過ごすために、小中学校でも特別支援教育の専門的知識の必要性を感じるが多くなっていると感じています。私も専門的な知識を身に付けたいという思いを数年前からもっていました。今回、所属校の協力もあり大学院で学ぶ機会を得ました。教職30年を経過した私ですが、日々の学びで知識が増え

ていくことに喜びを覚えます。また、授業をしてくださる教授陣の情熱溢れるエネルギーな授業に圧倒され、生涯学び続けることの意義をかみしめています。慣れないZoomやWi-Fiに戸惑うこともありますが、そんなときは学部卒院生の方々が優しく丁寧に教えてくれます。また現職院生の方との情報交換は自分の教員としての視野を広げてくれます。授業では、学部卒院生と現職教員が共に学び、教育現場での実践を理論化し、進化した実践に結び付けていく道筋を学ぶことができます。

これから教師となり秋田の教育を創造していく学部卒院生の皆さんと、多校種のベテランの現職院生の方たちが共に学び、議論を交わすことができる貴重な場である大学院は、「理論と実践の往還」を実感できる素晴らしい環境であると思います。この恵まれた環境の中で学べることを喜びとし、生涯学び続ける教師を目指して、仲間とともに協働の精神で励んでいきたいと思いません。

講義紹介「インクルーシブの理念と特別支援教育の推進」

発達教育・特別支援コース
現職院生1年次 今井 彩

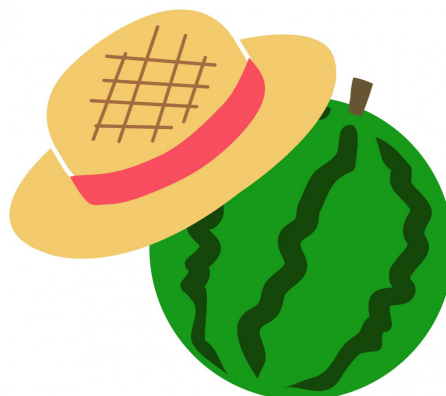
小・中学校の通常学級では、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされている児童生徒が1学級におよそ6.5%在籍し、この児童生徒が抱える困難の多くは発達障害が起因している可能性が高いと言われています。このことから、教育現場では特別支援教育を充実させるために、すべての教員が特別支援教育に関する一定の知識・技能を有することが求められています。また、この講義で学ぶインクルーシブの理念は、障害の有無だけではなく、性別や人種等による潜在的な偏見や差別をなくし、多様性を認め、互いに尊重し、すべての人が自分らしく生きることができる共生社会を目指すために、教育者として心得ておくべきことではないかと考えます。

この講義は、「合理的配慮」「障害者理解」「交流及び共同学習」「ユニバーサルデザイン」「不登校対応」など、学校種に関わらず、教育現場で必要とされる学びが多くあります。講義毎にゲストティーチャーがいて、様々な立場の先生方の話を聞くことができることも大きな魅力です。それぞれの視点での見方、考え方に触れながら、特別支援教育への理解を深め、インクルーシブ教育システムの構築に必要な具体的な方策について考えることができます。また、特別支援学校の専門監、教育委員会の指導

主事、障害者相談支援専門員といった普段接する機会がないゲストティーチャーの方に、直接質問をしたり、助言を得たりすることができます。

まだ教職経験がない学生の方にとっても、学校種問わず、この講義で得た知識が学校現場で必要になるときが嫌と言うほどあります。そして、障害の有無に関わらず、子どもの抱える問題が多岐に渡る現在、その問題に気づき、必要な支援を考えたり、学校の先生方と連携して方策を考えたりする方法も、この講義の中で学ぶことができます。

この講義で学ぶことが、どの学校においても「みんな知っている」「あたりまえ」というようになることを目指すことができればよいと思っています。



先日、ニュースを見ていると

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生2年次 工藤唯花

先日、ニュースを見ていると「群衆雪崩」が取り上げられていた。群衆雪崩とは、多くの人が密集して動けなくなった状態において、人が折り重なるように倒れていく現象である。

群衆雪崩が起きる可能性が高いのは、都心で震災が発生した場合である。ニュースキャスターは、「震災によって都心の交通機関がストップすると、多くの帰宅困難者が発生する。何百万人という帰宅困難者が一斉に自宅へ帰ろうとすると、密集により群衆雪崩を引き起こす可能性がある。」というようなことを話していた。画面には、大勢の人がぎゅうぎゅう詰めになりながら歩いている様子が映し出される。

一えっ？

何気なくニュースを見ていた私は、違和感と少しドキッとするような感覚があった。しかし、すぐにこの映像は東日本大震災直後に都心で発生した多くの帰宅困難者の様子であると気付く。「ああ、そうか。これはコロナウイルスが流行する前の映像か。」とその違和感は解消された。

「密集の回避」「ソーシャルディスタンス」など人と一定の距離を保つことが提唱されて1年半ほどである。1年半で、私は潜在意識として人が密集している場面に違和感を覚えるようになってしまった。こうした認識の変化は、私だけではないと思う。他者との距離にこれほど過敏になって、

人々が群れることへの抵抗があるのは人類の歴史上でも初めてのことでないか。

ニュースでは、都心での震災発生後は無理に帰宅せずその場で待機することを勧めている。続けて、コロナ禍における災害時の行動について検討しておくべきであると訴えていた。今は、非常事態中に非常事態に備え、対応する時代なのかと不思議な感じがした。

今、私は歴史的な場面に遭遇しているのだとしみじみ思う。実際に災害は各地で起きており、決して他人ごとではないし、人との距離についての認識の変化は、コロナウイルスの脅威が去った後も私たちの人との関わり方に影響を与えるかもしれない。

危機や変化にどう対応していくのかということや、変わらないものや変わってはならないものは何かということを考えていきたい。



教職実践インターンシップ I について

カリキュラム・授業開発コース

学部卒院生 1 年次 浅野匡平

「教職実践インターンシップ I」とは、学部卒院生 1 年次を対象とした、通年で行う実践実習科目です。

前期と後期で実習内容が異なり、前期の実習は、秋田大学の附属 4 校園において 2 日ずつ実施されました。幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の現状を見て、それぞれの良さや課題について学ぶことができます。

後期の実習は、それぞれの院生が希望する校種において、授業実践を中心とした教職の仕事を体験します。各自が持っている研究テーマを踏まえて実習計画を立て、課題意識を授業実践へと活かしながら、教職としての実践力を磨いていきます。

前期の実習では、様々な校種に行くことで、連携・接続が必要とされている理由や、子ども理解の大切さについて考え、理解を深めることができました。なかでも附属中学校でのインターンシップが印象に残っているので、紹介します。

附属中学校では、担当の教員から助言を頂きながら、実際に授業を行いました。そのなかで、授業中の子どもの様子から、何に興味を持っているのか、何処につまずきを感じているのかを把握しながら、子どもの実態に合った授業をつくっていくことの大切さに気付くことができました。

実習では、うまく授業をしたいという気持ちから、授業をしている自分の姿に目が行ってしまい

がちです。緊張から、子どもの様子を見る余裕を持たなかった経験がある方も多いのではないのでしょうか。そうならないためにも、教材研究をして授業計画を立て、子どもの反応を予想しておくなどの準備をしておくことが大切です。

これは、中学校に限った話ではありません。幼稚園であっても、小学校であっても、特別支援学校であっても、子どもの様子を見ることは大切なことです。そして子どもの様子を見る余裕を持つためには、入念な準備が必要不可欠です。

今回の実習を通して、子どもの様子を見ることの大切さ、そして準備することの大切さに気付くことができました。自分が教職として働く際、子どもの様子を見るができるように、今のうちから準備をしていきたいです。



グループリフレクション

カリキュラム・授業開発コース

学部卒院生2年次 伊藤真里奈

私たちのグループでは、6月16日、23日の2日間で前期のグループリフレクションがZOOMで行われた。グループは学部卒2年次が3名、学部卒1年次が1名の計4名が発表を行い、先生方の質問に答えた。

まず自身の発表について述べたい。前期のインターンシップを終えて、一日ごとに実習記録は記入していたものの、今回のグループリフレクションでは、前期という長期的な視点で振り返るよい機会であった。これまでの一日ごとの実習記録を読み直し、前期のインターンシップを通して、成果として何を得ることができたのか。また、どんな課題が見えてきたのか、後期の実習の見通しなどをもつことができた。私は音楽を専攻しており、主として研究の教科としているが、研究内容が「教科等横断的な授業」であるため、他教科との関連性が重要となる。その際、合科指導なのか、関連付けるだけなのか、という点を先生方からご指摘いただいた。後期実習の指導内容はこれから計画していくため、回答において断定はできなかつ

たが、指導計画を考察していく上で、「めあてと検証が結びつくように」「何が課題でどういうところが問題であるのか。」というご助言を念頭に置き、今後の研究を進めていきたい。

次に他の院生の発表について述べたい。学部卒2年次の2名においては、1年次の頃から研究内容をよく知っているため、今年度と昨年度の接続性が見られ、実習校に合わせた取り組みについて知ることができた。先行研究や教育の現状やデータを踏まえた問題提起になっており、大変勉強になった。学部卒1年次については、初めて研究構想を知ることができる機会であり、大学院における学習意欲の高さに驚いた。

前期のグループリフレクションを踏まえ、他の院生の発表を聞くことで、研究の進捗状況を知ることができたり、先生方からご助言をいただいたりすることで研究を見つめ直すことができた。今回の学びを後期の授業実践に向けて課題解決につながるよう努めていく。



7月以降の行事予定

7月13日（火）	前期実習の振り返り、後期実習に向けて
9月16日（木）	「マネジメントコース中間発表会」
9月21日（火）	「今年度の研究計画・中間報告」の発表会今年度の計画 ※1年次 SM、中間報告…2年次
9月下旬	ストマス集中実習
10月9日（土）	（午前）「惟落の会」年会、（午後）教師力高度化フォーラム
10月15-16日（金、土）	研修旅行「ふるさと秋田の教育資源とカリキュラム開発巡検」
12月7日（火）	実習後の計画についての説明

